空想ライブラリ

紅璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空想ライブラリ

【Ｎコード】
Ｎ８９８０Ｐ

【作者名】
紅璃

【あらすじ】
中学三年生の愛里は県内ではレベルトップと言われる票希高校を志望校に選ぶ。愛里の中学からは一人の受験生だったため不安も抱えていたが、無事に合格することができる。
しかし、そこで愛里を待っていたのは金色のピアスをつけた優等生学校には珍しい不良生徒…だけではなくちいさい頃お世話になったイケメン従兄弟もいて‥？

A－001

ほんの少しの学力と新品の制服があれば
　誰だってすぐに高校生になれると信じていた。
ちょっとの勇気と自分への自信があれば
　可愛くなくったって恋はできると思っていた。
相手のことを理解する努力をしていけば
　周りの人に、誰からだって“好かれる”って
絶対、絶対そうなんだって信じてた。

だけど、どうして？

中途半端に伸ばした赤毛とうるさい位の無邪気な瞳
自分にも毎日も全然期待していないから、協調性なんて微塵もないのに。

彼は私より遙か前を悠々と歩いていて時折振り返って同情心からか、私に手をのばそうとした。
そして、気がつけば彼の隣にはいつも綺麗な娘(こ)達が集まって賑やかだった。
本当はすごく酷い人なのに、誰一人として彼を嫌う子はいなかった。

私の血がにじむぐらい力んだ生き方を見た彼はあざ笑うことなく
「それも、君らしい。」
そう言って微笑んでいた。

それが、
私の彼に対する最初の記憶。

A－001（後書き）

初心者なので、文章もあやふやなところはありますがっよかったら読んでください。

読んでくれるだけでもすごく嬉しいです！

A－002

とても暑い夏の日。

私は両手にアイスを持ってせん風きの前をじん取り、三とうりゅうで涼んでいた。

夏休みだから、毎年こうれいおばあちゃんの家にお泊まりをしに来ているのです。

おばあちゃんの家はとてもいなかにあってゲームもできないし友達もいない。

本当は、来たくなかったけど
ママが年に1回おばあちゃんに「おやこうこう」できるってよろこぶから付いてきてあげている。

それでさっき、おばあちゃんに「買い出し」に行かされた私はこうして涼んでいるのである。

よく、おばあちゃんはわしつは風通しがいいんだよ、なんていうけど
もっと最近の“ちきゅうかんきょう”にくわしくなってクーラーといものを付けるべきだと思う。

両手のアイスを食べあきた私はせん風きに向かって叫び出す。

十回目の「あー」をやろうとしたときにおばあちゃんの家の古びたドアがガラガラと開いた。

「おっばーちゃーん！久しぶりー！！」

私はその声にびくりとする。

おばあちゃんと呼ぶのはこの家で私と弟のこうやしかいない。

だれ？

と、言ってみたいんだけど聞くべきおばあちゃんとママは今外に出ている。

こうやはまだまだお子さまだから、ママにおんぶされていっしょに連れて行かれたし。

カギをちゃんと閉めておけばよかった、なんて思ったときとうとうフスマがガラリとあいた。

「…あれ？お前…誰？」

年長組だからって大人になったわけじゃないけど、
私はママ達がよくいう「キラキラするオーラ」が出ている男が分かった気がした。

かみの毛はぼさぼさで、半そで短パンのいかにもって感じの格好をしていたけど
私の目の前にいる男の子は紛れもなく

ひかっていた。

A－003

「あーっ、もしかして…あいり？」

にこにこ笑う男の子はどうやら小学生みたい。

にこにこ笑う男の子はどうやら私のことを知っていた。

「だぁれ？」

「ちぇ、僕はお前のことしってるのにお前はしらないのかよ？
僕はあんどう　せな」

首をかしげてみせる。

「お前の…いとこだよ。」

「いとこってなに？せなは私のおにいちゃんなの？」

「うん、そう。」

まだお昼だったのに
せなのほっぺたは夕日に照らされてるみたいだった。

「あいりのおにいちゃん。」

私はびっくりしたけど
こんなかっこいいお兄ちゃんならうれしいなって思った。

それからせなは
おばあちゃんの家で私たちといっしょに三日間をすごした。

せなは力持ちだったし、うそはつかなかった。
いっつも笑っておばあちゃんの言うことを聞いて私とこうやに優しかった。

たまに私をおばあちゃんの家の近くの女の子の家に連れて行ってくれたけど

その子達は私より年が大きかったから友達にはなれなかった。

それに、
その子達はいっつもせなの周りにくっついて騒いでいたから私はちょっとつまらなくて。

夏休みも終わりに近づいて　私達は家に帰ることになった。
せなはバイバイって手をふって、悲しくなさそうな顔をしていたけど
私はとっても悲しくて　バイバイって言えなくて、せなの耳でちいさく

「また来るからね。あいりのこと待っててね。」

そう言ったのを覚えている。

そうでもいわないと、せなならどっか行っちゃうってちいさいながらに気付いていたから。

次の年からおばあちゃんの家に行くのが楽しみになったけど
パパとママがべつべつになったらしくて、
私はママといっしょにいるからおばあちゃんの家にはいけなくなってしまった。

B－001

街が赤と緑のクリスマスカラーに染められようとする１２月。
私たちの頭の中には赤と白しか色がなかった。
それも、「勝利」を意味する赤なのか、「敗北」を意味する白なのか。

はっきりと別れた二色で今私たちの未来が左右されるのだから。

「なんだか自覚ないよね、」

物足りなさそうに言うのは、黒髪ストレートにメガネをかけた彼女である。
彼女の一言に一人切羽詰まっている状況にもかかわらず、同意の意を示す。

「なんだか、学校に来てる気がしないもんね。」

笑って言う愛里に、黒髪の彼女は笑って言う。

「だって、アンタは頭いいじゃない？
私はもう手遅れだと知っての、自覚なし。」

二人がそんな会話をしている間にも
教室ではシャーペンのかちかちという音が絶えず響いている。

そう――――――――――――――――――――
彼女たち含め、今中学三年生は受験期に突入しようとしているの

である。

「うちはもー無理っ！」

二人の会話に割って入ってきたのは前髪をピンで留めた活発そうな女子生徒、鈴木杏奈である。

「いいよね、愛里もカエデも。
二人とも志望校余裕でしょ？
うちなんていまだに担任からいろいろ言われるもん。」

「そんな事ないって。だって私、高校は県外に引っ越すついでだからさ。」

黒髪の彼女…梶野カエデは、ははは と笑いながら返す。

「愛里の方が私よりレベル高いところいくでしょう？」

「愛ちゃん頭いいもんね！」

顔をぐいぐいと近づけて愛里に迫る二人に
愛里はなんていったらいいものかと迷いながらも正直に話すことを決めた。

「いちお…その…票希高校…行こうかなとかって。」

ぼそっと言った愛里の一言が聞こえなかったのか
二人は沈黙して愛里を見つめた。
しかし、それもつかの間、他のクラスメイトに明らかに迷惑であろう声量で

「すっっっっっごおおおおおおおおおおい！！！！！」

彼女たちは叫んだのであった。

票希高校と言えば、県内ではレベルトップの高校である。
最近では県外からの進学者も多く、愛里達の住む県では難易度が最も高い。

生真面目な生徒だったせいか、テストの点がさほど良くなくても、
周囲のクラスメイトが愛里に対する評価は「優等生」というものであった。
学校では学年首位であったわけでもなかったにも関わらずこの高校を選んだのは、
知り合いと離れた環境で自分を試す事に愛里が憧れていたからかも知れない。

だからこそ、この高校に懸ける熱意は誰よりもあつく、
そして何より自分を追い込むまでの状況に立っているのであった。

クリスマスの鈴の音がどこか遠くに感じ始めるその頃。
私はどんな状況なんだろうと

カエデと杏奈の二人にちやほやされながら、愛里はただ考えていた。

B－002

受験日当日。
私は味がよく分からないまま朝食をとり、家族の応援を遠くに感じながら母さんの車に乗り込んだ。
この間まで「受験って感じがしないよね」なんて余裕ぶっていたのもつかの間で、
やっぱり当日ともなると興奮に近い緊張で体も気持ちもこわばってしまう。

「気合い入れて！」

だけども、母さんがそう言ったのは覚えている。
試験開始までもうしばらく時間があるとは思いつつも、
今まで苦手をまとめてきたノートを汗ばんだ手でめくりながら確認する。
一切声が漏れない教室は、既に受験会場。
いつか「始め」の声が聞こえたら、それが私達のゴール地点へのラストスパートを示す声。

気がついたときは
シャーペンをおいたときだった。

ちゃんと解けたかな…
頭真っ白なって、未解答なんてないよね…

そういう不安が残りつつも　私は受験を終えたのだ、今。

思えば早い一日だった。
いや、早い一年だった。

合否はまだ分からないけれど
もう私がする事はないから、落ち着いてゆっくり待っていよう。

「受験が終わったら、どんな状態になってるか分からないから迎えに来ないで。」

朝母さんに自分で言った言葉だ。

票希高校は家の隣の市にあるから、帰りは電車を乗り継がなければいけない。
高校見学の時一度訪れた事があったけど、それも車に乗ってきたときだったから実際ここから歩いて帰るのは初めて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8980p/

空想ライブラリ

2011年10月8日13時42分発行